



「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第2回（7月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、承諾を得ています。

古い碑を前にして

山東省 付曉利

2012年3月、北海道から硯鴻書道クラブの40数人が山東省を訪れて文化交流を行った。今回の交流は若手女流書道家に限られていたため、訪れたメンバーが若くてきれいな女性ばかりだったので、中国側としては非常に羨ましかった。北海道の総人口はわずか400数万人で、済南の半分にも及ばない。しかし、そのうちの1つの書道館からこれ程多くの人々が来るとは、日本の女性書道家人口の多さを感じた。

更に意外だったのは、かなり造詣の深いある日本の書道家が、あまりにも謙虚で中国の書道家に敬虔な眼差しさえ向けていたことである。中国の少女はこうした態度に馴染めず、ばつの悪ささえ感じたのである。明らかに、こうした行為は遠慮の一言で片付くものではなく、3日後にようやく疑問が解けたのである。

交流の過程で、日本側から現場で1つリクエストがあった。済南一の石碑と讃えられる房彦謙碑を見学したいというのだ。

房彦謙碑は、書道界でこそ予てより名のあるものだが、観光地としての人気はない。中国人ガイドでさえ、多くは、そもそも碑の場所をはっきり言えなかった。10数社の旅行社に当たって、7～8人の大型バスの運転手に尋ね、最後に見つけた現地のカート運転手に案内してもらって、やっと、この済南市の東の郊外に位置する古墳を訪れることができた。古墳の墓碑は既に保護してあったが、周囲の賑やかさに比べると、その小屋はまったく相容れないものだった。

この時、驚くべき出来事が起こったのである。日本の女流書道家達は、それが房彦謙碑であることを確認すると、数日来ずっと上品で礼儀正しく、振る舞いも優雅であった乙女達が、急に自分を抑えることができない様子で、期せずして同時に跪いたのである。このぼろぼろになってしまった墓碑の前に這い寄る者、声も立てずに泣く者さえいた。この様子に主催者はどうしたらよいか分からなくなり、急いで歩み寄り助け起こしながら、その原因を当てずっぽうに推測してみた。

主催者側は後で知ったことなのだが、そもそも、この有名な書家である欧陽詢が自ら書いた房彦謙碑の日本における影響力は、中国におけるよりずっと大きいものであって、房彦謙碑は、日本の学童が書道を練習する重要な法帖の中にあり、日本の書家の心の中では最高の地位にあるのだ。どういうことかと言うと、よく知られている日本の有名なメディア『朝日新聞』と『読売新聞』の題字は、欧陽詢が記した『房彦謙碑帖』と『宗聖観記』からの集字である。誇張ではなく、彼女たちは小さい頃から欧陽詢の字を見て育ってきたのである。『房彦謙碑帖』については、彼女たちが更にどれほど模写し、何年かみしめてきたか分からない。この書を書くために、一体どれだけの汗を流し、どれだけの墨や筆を費したことも、分かるのは自分だけである。ただ惜しいことに、これほど重要な法帖で、彼女たちがこうして何年も見てきたものは、単なる拓本であり、影印本しかない作品もある。原本である石碑に拝謁することは彼女たちの抱いていた夢だったのだ。だから、神聖なもののように思っていた石碑の文字を眼前にして、これほど感動するのも不思議なことではないのである。道理で初対面の際、彼女たちがうやうやし過ぎたのも納得できる。そもそも日本の女性書道家の中では、中国は書道芸術の始祖というだけではなく、最も偉大に思っている書道の巨匠を育んだ土地なのである。だから、彼女たちは受け入れ側の人々に謙虚な眼差しを向けていたのだ。

その後、彼女たちは次第に落ち着いてきて、石碑に彫りつけられた文字をハンカチで拭う者あり、ひざまずいて石碑の下にある土を撫でる者あり、まるで千百年前に書家が奮起して一気に書く情景に陶醉するかのよう…

この時、言葉は何も要らなかった。この古い石碑を前に、一同の交流を妨げるものはなく、言葉そのものも既に余計であった。私達は、粗末で荒涼でさえある墓碑を前に、とても温かく感動に満ちた午前のひと時を過ごしたのだ。今こうして思い出しても、心はこの上なく温かい。

10日間の交流も終わり、彼女たちが帰国する前日は、ちょうど東日本大震災から1周年の日だった。空港で見送る時、更に人を感動させる一幕があった。搭乗前、日本の女流書道家たちは2列に並び、私達に向かってお辞儀をして謝意を表すと、突然、8尺ほどの全紙に書かれた書道の大作を広げて見せたのである。そこには雄大で力強い8つの大きな字で「一衣帯水、困米之恩」と記されていた。後書きの所には小さな字で「日本国民に対する中国の助けに感謝します」という一行があった。

一同はこの情景に深く感じ入り、感動がやむことはなかった。困米之恩の故事は『三国志演義』が典である。ある年、田畑が凶作となり、江東の周瑜は家で蓄えていた食糧が足りなくなり、魯肅の家へ借りに行った。魯肅の家は裕福で、穀倉には2困米（1困は3千升）あったが、一族郎党の人数が多いため、食糧には決して余裕がなかった。それでも、魯肅はためらうことなく1困を周瑜に与えた。周瑜はその恩を死ぬまで覚えていたという。この作品は、彼女たちがこの故事から引用して、大震災後の日本に対する中国からの無私の援助に感謝したものであるということが分かる。

その後、彼女たちは空港に居合わせた人全員に小さなプレゼントを配り始めた。この小さなサプライズは中国の旅行者を大いに感動させた。まさか慌ただしい搭乗ロビーで、極めて温かい人情劇が繰り広げられるとは。しかも主役は、中日の最も普通の人たちだったのだから。